

第一章 きみむらさ

六月のそよ風が、川べりの青葉を揺らしている。花嫁を乗せた平底舟を一目見ようと、矢那川のほとりに人がひしめいていた。木更津界隈の老若男女が一堂に会したかのような人ばかりである。

うららかな西日に包まれて、嫁入り舟がゆっくり流れてくると、人々は歓声を上げ、川の兩岸から盛大な拍手が沸き起こった。

朱墨で「寿」と書かれた台提灯が舳先に掲げられ、船底に敷かれた真紅の毛氈が鮮やかである。船梁に腰を掛け、白い練帽子を深くかぶった十六歳の少女が、紅をさした唇に笑みをたたえている。その後ろでかしまっているのが媒酌人、友野七左衛門夫妻、船尾で櫓を操っているのは義理の兄、新一郎であった。

木更津人なら誰もが、この花嫁のことを知っている。太田村惣名主、地曳新兵衛の次女で「なを」という。

幼い頃から礼儀作法がよく身につけており、いつもほがらかに笑っている。料理が好きで、家の作男や女中のおやつにと、あられやかきもちを毎日作っているという話は町中で評判だった。梅干しや味噌の仕込みから、たくあんにらっきよ漬、豆腐までも自分で作った。一方で、当時の娘にしてはめずらしく、四書を素読したりもする。長じるにつれて肌が透き通るように白く、鼻筋がとおり、すらりと背丈も高くなった。その容姿は、花をあげむく美しさ、と誰もが太鼓判を押すほどであったから、近隣の名主や商家からひっきりなしに縁談が持ち込まれていた。

地曳家は、潤沢な資産をつぎ込んで、文久元年に大型船一艘を購入し、海運業に乗り出したばかりであった。「明王丸」と名付けられたその船は、上口長さ六十五尺、幅十七尺、三百石積の帆船で、江戸・木更津間を活発に往復している。船頭は、鶴岡源兵衛の家から婿養子に來た新一郎が務めており、彼の妻は、なをの二歳年上の姉で「すま」といった。姉の方も太田小町と称されるほど美しかったが、なををよりずっと小柄であり、全体的に

ふっくらとして愛嬌がある。

なをとすまの姉妹は、明王丸の航海安全を祈願するために、太田村から矢那川を下って、木更津湊にほど近い八劔八幡神社へたびたび詣でるようになった。

それは、慶応元年五月のある日のこと。

江戸橋西側の河岸から出帆した明王丸は、順風にめぐまれ、「江戸前」と呼ばれる内湾の波を切り分けて進んだ。二刻以上快走を続けているから、そろそろ木更津湊に着くころである。

空に筋雲が流れ、紺碧の海が白い三角波を立てて船を揺らした。

褐色の袴に両刀をたばさみ、髪を総髪にした青年が、手縄につかまることもなく、懐手をして船上に立っている。

「富津岬が見えてくるとホッとするべ」

錨泊の準備にかかりながら、地曳新一郎が声をかけた。暑い日盛りだから股引をはいておらず、印半纏の下はふんどし一丁である。

「この辺りまで来ると、風が心地いいな」

房総半島の東方沖を流れる黒潮が、爽やかな風を吹かせるのだろうか。青年は次第に近づいてくる湊の様子を目を細めて眺めていた。

名を、大河内三千太郎という。木更津の染物屋「島屋」の息子で、歳は十九。武士の身分ではなかったが、上総ではすでに知名の剣士であり、今回の江戸遊学で心形刀流を修めてきた。御徒町の練武館道場に三年間住み込み、小天狗と称された伊庭八郎などと鍛錬を積んだ。

「ミチタ、幕府お墨付きの心形刀流は、やっぱりすごいのか」

「いや、不二心流とそう変わらない。心の修養を怠れば技も乱れると諭すあたり、剣理に通ずるものがある。技は、二刀術が面白かったな。あれはうちの流派にはないものだ」

「それ、こんど教えてくれよ」

白い歯を見せながら、新一郎は錨を海に投げ込んだ。乗り子たちが手際よく帆をたたんだ。

木更津の海は遠浅である。船は沖合で停泊し、干潮の場合、人は干潟を徒歩で渡る。

三千太郎は袴の裾をからげて、砂泥に沈み込む足先を眺めながら歩いた。小さな蟹がツツと左右へ散ってゆく。

波止場の段々を上りきった時、そこに、「なを」が立っていた。

姉と一緒に新一郎を迎えに来ていたのだった。

三千太郎となをは、唐突に顔を見合わせたまま、しばらく時間が止まったように動かなかった。

「なをと会うのは、初めてか」後ろで新一郎の声がして、三千太郎は我に返った。

なをも我に返り、顔が紅潮するのを感じた。

新一郎は、鉢巻きにしていた布で汗をぬぐうと、それをぱっと開いてみせた。雪花絞りの模様で染められた手拭いだった。

「木更津島屋の藍染といえば、江戸でもたいそうな人気なんだぞ。なを、この色男はその若旦那だ。ひいきにしてもらえ」そう言って二人の間を通り抜けた。

三千太郎は、なをから目をそらし、やはり藍染の手拭いを懐から取り出して足裏の砂を払い落としながら、

「おれは、若旦那なんかじゃないさ」と、つぶやいたようであった。

「えっ」となをが聞き返すと、三千太郎は顔を上げて微笑んでみせた。

「おれは、若旦那なんて身分じゃない。島屋には朝三郎兄さんっていう、立派な跡取りがいる。おれは妾腹。しかも染物のことなんぞ何んも知らない。ただの剣術見習いだ」

「はあ」となをはうなずきつつ、三千太郎の引き締まった口元や、切れ長の二重まぶたを目に留めた。なんて清潔な感じのするお方だろうと思った。

新一郎が振り返って「早く日陰に入ろう。今日は暑くてかなわねえや」と二人をせかし、湊の正面に見える八剣八幡神社の表参道を、すまと連れ立って行ってしまった。

このとき、三千太郎も、なをも、自分たちが一月後に祝言をあげるなど想像もしなかったにちがいない。二人はそれ以上ことばを交わすこともなく、新一郎夫婦の後に続いた。三千太郎の少し後ろをなをが歩いた。なをの桐下駄が砂利を踏む音が涼しく響いた。

矢那川を下って来た嫁入り舟が、舷側を川岸の石段に寄せた。

ここは島屋の敷地内で、普段なら藍甕を洗う水が川の色を真っ青に染めて流れているところである。

友野七左衛門の妻に手を取られながら、なをは白無垢の裾を引き上げて舟縁をまたいだ。

そのとき、舟が少し揺れた。思わず三千太郎が身を乗り出したが、なをはぴょんと石段に飛び移り、子供のような笑顔をみせた。

紅を引いた唇が、雪膚に映えて艶やかであった。

媒酌人を務める友野七左衛門は、不二心流の門人であり、流派を代表する長老でもある。

流祖中村一心斎の供養塔を南町成就寺の門前に建立した際、

大河内幸左衛門

同 孫左衛門

同 総三郎

と共に、門石に連名刻字した一人である。

大河内家は、染物屋であると同時に、不二心流剣術の宗家でもあった。

初代中村一心斎から印可を受けて正統二世となった大河内縫殿三郎は、三千太郎の大伯父であり、この大伯父の長弟が幸左衛門、次弟が孫左衛門、長男が総三郎である。いずれも剣の使い手で、長男の総三郎が三世を継ぐのは確実であると目されている。

染物屋の職人は、各地に染料の藍玉を卸して廻るため、高額現金を持ち歩かねばならず、この金を狙う野盗の類に襲われることがたびたびあった。そのため、番頭や手代が道

中ざしを一本腰にさすことは護身上の必然で、店ぐるみで剣術の稽古に取り組むこともめずらしくなかったのである。大河内家も代々剣術に励むうち、やがて縫殿三郎のような剣豪を生み出すに至った。

大河内家の先祖は武士である。

天正十年、戦傷がもとで不具となった伊藤河内守為安という十八歳の武者が、縁故を頼って信州から下総へ下り、匝瑳郡西小笹村(現、匝瑳市)に隠棲の居を構えて帰農した。子孫はやがて藍業で富を築き、縫殿三郎の代で伊藤姓から「大河内」へ改名する。西小笹村を知行地にする旗本、菅沼氏が縫殿三郎の武勇を称え、先祖の受領名である「河内」に「大」の字を冠した姓を与えたからである。血族の大半はこれを受け入れたが、「伊藤」のままでもよとした家も少なからずあった。

本家の屋号は「喜左衛門」で、縫殿三郎は西小笹村の本家を継ぎ、藍業を継承しつつ、庭の一面に道場を建てて門人の育成に努めている。御年七十六だが、剣技にいささかの衰えもみせなかった。

縫殿三郎の二人の弟、幸左衛門と孫左衛門は上総木更津に住み、江戸越前堀の藍問屋へ島六の株を買って、染物屋へ島屋を経営している。こちらも自宅の敷地内と八剣八幡神社の境内に道場を構えて、門弟は近隣だけでも二百人は下らない。その内訳はほとんどが商人か農民であり、木更津不二心流の門人は「島屋門」と敬称された。

三千太郎は幸左衛門の孫である。父は「一郎」といい、不二心流の剣士として『武術英名録』にその名を留めるほどの使い手だったが、文久三年、病を得て亡くなった。

大河内家の男たちは、どれも二重まぶたで上背があり、藍染という繊細な家業の中で育った故か、どこか絹地のような清潔感があった。亡父一郎のように、染物屋の若旦那で知名の剣士ともなれば浮いた話は避けられないのかもしれない。正妻の久との間に嫡子朝三郎をもうけた三年後、妾に産ませたのが三千太郎であり、双子の弟、常盤之助であった。

この時代、双子は「畜生腹」と呼ばれて忌み嫌われた。出生は弘化三年十月十五日だっ

たが、後から出た常盤之助は一月遅れで届けられ、戸籍上は祖父幸左衛門の養子となっている。この双子の兄弟は、素性からして影のごとく生きていくことを運命づけられていたはずであるが、一郎は先に生まれた子に「三千太郎」という名を付けた。この「三」は、縫殿三郎の武勇にあやかっつとられたものであり、大河内一族の長男は大抵「三郎」を通字にしている。庶流のためさすがに三郎とは名付けられなかったにせよ、「三千」とは仏教語の「三千世界」からとられたもので、「この宇宙のすべて」という意味である。常盤之助の「常盤」も、「永久不変」を意味する。この命名から伺える一郎の教養は詩的であり、気宇壮大な性格であったにちがいない。

入相の鐘が鳴る頃、矢那川の岸から島屋まで歩く新郎新婦の晴れ姿を一目見ようと、沿道にも人垣ができていた。ハレの日をはばかりか鴉は鳴りをひそめ、湊町らしく海鳥の声が聞こえてくる。木更津の海に水平線はなく、三浦半島が遠くに見えるのだった。その上空に、山肌の赤く染まった富士山が、まるで北斎の浮世絵のようにたたずんでいる。

誰もが二人の門出を祝福していた。好いた者同士が自分たちの意志で結ばれるなど、まじめずらしい時代なのであった。しかも、出会って一月も経ずに祝言とは、なんと痛快なことだろう。嘉永六年のペリー来航以来、物価が高騰し、幕府の権威は失墜しつつあり、江戸湾を行き交ううわさ話は、どれも暗い話題ばかりだった。そこへ飛び込んできた二人の電撃的な結婚は、手放して祝福してはばからない町の吉事であった。三千太郎となをの初々しい晴れ姿を眺めるだけでも眼福である。

島屋の暖簾をくぐる前に、二人はいちど立ち止まった。

うやうやしく常盤之助が店先に出てくると、なをに朱盃を差し出した。

なをが押し頂くように盃を手にすると、常盤之助は提子を傾けて、家の井戸から汲んだ水を注いだ。

花嫁が婚家に入る最初の儀式だった。家の水を飲むことで、その家の人間になるのである。

ずっと飲み干すと、なをは照れ臭そうに盃を返した。

少し緊張した様子のをを氣遣って、常盤之助が冗談を言った。

「なをさん、俺じゃだめだったの？」

三千太郎と常盤之助の面立ちはよく似ている。強いていえば常盤之助の方が少しばかりおとなしそうに見えるかもしれない。

この冗談を不謹慎とみた媒酌人の七左衛門は、すかさず「これッ」とたしなめたが、当のなをが吹き出したから、沿道は爆笑に包まれて、しまいには七左衛門も扇子を広げて笑い出す始末だった。

二人が屋敷に入った後、店先や道場で酒樽の鏡開きが行われた。町の人々に祝酒がふるまわれ、子供たちには紅白の餅がくばられた。

三千太郎となをが奥座敷に着くと、その左右に両家の親類が顔を並べた。

大河内家は当主一郎が亡くなっているため、その席に嫡男の朝三郎が着いている。

大柄な一族の中で、この若者だけ背が低い。しかも顔の半分が古い火傷の痕で歪んでおり、羽織の袖からのぞく手も同じように火傷で指がそろっていないかった。

安政の頃、朝三郎が行燈を倒したことから火を出した。みるみる島屋一戸を焼き尽くすと、その炎は折からの強風にあおられて四隣に延焼し、町中あげての必死の消火もむなし、一晩で木更津の過半を焼き尽くしてしまった。罹災戸数は三百を越えたが、幸いにも死傷者はなかった。この火事は「島屋火事」と呼ばれ、自然災害に匹敵するほどの大打撃を人々の生活と記憶に残した。

この火事で大火傷を負った朝三郎は、幸運にも一命をとりとめた。

幼い頃から脆弱で、寺子屋の師匠からも愚鈍と評され、あげくに失火の原因となってしまった朝三郎のことを、大河内一族は徹頭徹尾かばい、その後も暖かく育んできた。父の一郎は、島屋の私財を投じて町の復興に取り組み続けたが、その完遂を見届けることなく病に倒れ、息子の不始末を詫びながら逝ってしまった。

この火事がそうさせたのか、生来の性格なのか、朝三郎は自分以外の人間を憎んでいるようであり、憎悪の念を誰彼構わず態度に出す。特に、三千太郎に対する当たりが強かった。

祝儀の席にいても腹違いの弟を祝福している様子など微塵もなく、むしろ苦々しく三千太郎をにらみつけている。

その横に端座しているのは、朝三郎の母「久」である。一郎亡き後体調を崩し、労咳を患っている疑いがあった。本来なら床に伏しているべき体にもかかわらず、体面を重んじて公の場に出てきている。しかしそれによって、三千太郎の実母である「クニ」がこの場におられず、次の間に控えていた。

久の横にるのが、匝瑳郡小笹村から祝福に駆け付けた大伯父、不二心流正統二世の縫殿三郎。

その横に、島屋の店主で祖父の幸左衛門。ちなみに「幸左衛門」は屋号であり、諱は「幸芳」といった。一郎も亡くなる直前は幸左衛門一郎と名乗ったし、将来的には朝三郎がこの名を継ぐことになるだろう。

その横に、大叔父の孫左衛門。島屋の大番頭であり、算盤もできれば剣の腕も立つ。その横に、鬚は大たぶさ、無精ひげを生やした浅黒い男が、不二心流三世候補の総三郎。一族の総領的存在で、このとき四十一。

さらにその横に、頭を総髪にした伊藤実心斎直行。本名、伊藤重之助。まだ二十八歳という若さだが、剣の腕は、あるいは総三郎を越えるかもしれないと目されている。子供のころ赤ら顔だったので、赤ら顔の重之助をつづめて「あかじゅう」と呼ばれていた。今でもそのあだ名で呼ぶのは総三郎ぐらいしかおらず、それが気に食わないばかりでもなからうが、総三郎のことを嫌っている。今宵この場に居るのは一族中の「伊藤」を代表しているのと、自分が稽古をつけてきた三千太郎を祝福するためだったが、始祖の姓を名乗っている自分の席次が総三郎より下なのが心外であった。

対面になをの家族もそろっている。

父は大田村惣名主の地曳新兵衛。「新兵衛」は屋号で諱は勝政。数百年続く家柄で、名字帯刀をゆるされていた。太田山と呼ばれる小山の麓に屋敷があって、なをは幼い頃、よく縁側で伸び上がって遠くを眺めたものだった。なだらかに下ってゆく丘陵の向こうに矢那川が流れ、一面に広がる良田を一望できたからである。

母「とみ」は、万石村の出で「万石小町」と称されたほどの美貌であり、齢を重ねても年相応の美しさを失っていない。

跡取りは婿養子に入った新一郎勝義。明王丸の船頭を勤め、幼少から不二心流の門弟であり、三千太郎とは幼馴染でもある。

新一郎の妻すまは、なをの大の仲良しで、姉である。巷ではなをの花嫁衣裳から嫁入り道具まで、一切をすまが見立てたと噂されていたが、あながち風紋とも言い切れない。自身の着物の仕立てから、家族のものまで、その審美眼と手先の器用さは折り紙付きであり、近隣諸村の娘たちから一目置かれていた。にもかかわらず、なぜか料理だけは上達せず、いまだなをから手ほどきを受けている。

三千太郎がとつぜん地曳家にやってきて、なをを嫁に下さいと平伏したとき、父の新兵衛は万感の思いにかられて目頭を熱くしたものだ。

木更津中の人々が、大河内家と島屋門を尊敬していたからである。

関東筋は、土地の多くが幕府の直轄領か幕臣の知行地で、「藩」というものがほとんど存在しない。現在の千葉県域には十七藩しかなく、佐倉藩十一万石を最大として、古川藩八万石、関宿藩四万八千石、久留里藩、飯野藩三万、大多喜藩二万と続き、残りはすべて一万石程度の小藩だった。四十万石を越える「大藩」は一つもなく、住人の多くは徳川家直属の民であるといっている。

直轄領を管理する代官所は、ごく少数の事務官僚で運営されており、細かく入り組んだ知行地を治めていたのは各個の旗本であった。どちらも領内支配のための武力をほとんど

持たず、幕府の権威を後ろ盾にしているだけである。したがって治安維持能力が極めて低く、さらには一所から上がる年貢米を複数の旗本で分け合っていたりもするから、その土地の責任者が誰なのか不明瞭である場合が多かった。このような地域では行政改革が行われ難しく、治安が悪化しやすいのは必然であって、大げさにいうなら無法地帯に近い土地柄となっていた。

かつて、徳川家康が豊臣を滅ぼした大阪冬の陣において、木更津の船乗りたちが複数徴用され、合戦の勝利に貢献したという。この功績により、江戸・木更津間の渡船営業権を独占的に与えられていた。日本橋と江戸橋の中間付近に木更津河岸が設けられ、ここへ行き交う商船は木更津船、通称「五大力船」と呼ばれている。力持ちの五大力菩薩の名にあやかるこの船の喫水は浅く、船体の幅も狭く設計され、海だけでなく河川も航行できるようになっている。一般の廻船なら荷物をいったん伝馬船などに移すが、五大力船は直接河口に乗り入れることができた。乗り子たちが舷側の棹をかきながら「ヤッサイモッサイ（そごどけそこ通せ）」と威勢のいい掛け声で遡航して来るから、出船入船もこの船を見ると避けて通った。荷物の輸送だけでなく渡航客も受け入れており、房州までの所要時間は順風であれば四時間程度、運賃は二百文ほどであった。

江戸時代の往来は検問が厳重で、箱根の関所などは特に有名であるが、木更津河岸には公設の船番所がなく、面倒な査検もなく江戸湾を渡れるとあって人気があった。しかしそれによって、犯罪者や逃亡犯なども多数流入してくる。湾岸屈指の木更津湊は港湾人足の溜まり場でもあったから、暴力沙汰は日常茶飯事で、殺人でさえめずらしくない。不安定な治安を取り締まる役人もほとんどいない。

あれは確か、四年ほど前の事だったと地曳新兵衛は回想する。

木更津南町で強盗事件が起こった。犯人は勤王の志士を自称する連中で、白昼堂々と辻に立ち、「鎖港攘夷のための義兵を挙げ、勅旨をもって幕府の罪を問い正し、塗炭の苦にあえぐ百姓を救わんとす」などと宣言するあたりはもっともらしかったが、軍用金を強請

し、近隣の商家に押し入るとなれば強盗の所業と変わらない。あげくにさらなる金穀と逃亡用の船まで要求し、金物商和田屋の娘「りう」を人質に取った。

この騒ぎが、島屋の不二心流道場に知らされたとき、門弟を指南していたのは「若先生」と呼ばれていた大河内阿三郎正道、十八歳だった。

正道は、正統二世縫殿三郎の晩年の子で、総三郎の弟である。幼少から父に剣術を叩き込まれ、十三歳で神道無念流の斉藤弥九郎道場に入門、先ごろ帰郷したばかりであった。

木更津や周辺の村々で何か騒動が起きた場合、住民が真つ先に頼りとしたのが島屋門だったのである。代官所の武士よりも勇敢に危険の中へ飛び込んでゆく。しかも、そのことに対する見返りを一切求めず、ただ人々のために戦うことを是としていた。流派自体にそのような思想があり、それゆえ町人や農民に支持されてもいる。

尊王攘夷を騙る強盗団は十人を下らなかつたが、辻の人だかりを素早くかき分けて突き進むと、正道はすかさず抜刀し、賊の一人を峰打ちにした。

と、そこまでは良かったが、りうの首に腕をまわした領袖とおぼしき浪人が、どこで手に入れたものか、突如懐から拳銃を取り出したから、野次馬からどよめきが起こった。さすがの若先生も、それ以上踏み込むことができない。

八劔八幡神社の道場にも危急が告げられた。この日そこで稽古を付けていたのは三千太郎と、宮司の嫡子、八劔勝壽だった。

勝壽は、「壽」の字が難しすぎるといって自分の名を嫌っている。そのせいかわからないが、まわりの者たちは名を音読みにして「しょうじゅ」と呼んでいた。代々国学を修めている家柄でもあったから、普段から狩衣に指袴といった神職らしい出で立ちで、長く伸ばした髪を頭上で結い上げている。日に焼けたいかつい漢の多い木更津界隈の若者にしては、ふと見れば女性と見まがう上品な面立ちであった。

その勝壽が、

「相手が鉄砲じゃあ、さすがのマサミつつあんもお手上げだべ」と、めずらしく弱気なことを言った。

「おれは、これでいく」三千太郎が手に取ったのは鎖鎌であった。

「ああ、それなら対抗できるかもしれないな。ミチタが鉄砲野郎をぶちのめしてくれりゃあ、あとの雑魚はおれがやっつけるから」

二人が現場に駆け付けた時、正道はじりじりと間合いを詰めながら、拳銃を突き出した男をにらみつけていた。この正道の気魄が、事態をいい具合に膠着させていた。

「マサ兄ィ、ここはおれにまかせてくれ」

三千太郎は鎌の柄を右手に持ち、垂直に立てて胸の前で構えた。左手に分銅の付いた鎖を垂らす。これをひゅんひゅんと回転させながら、賊の領袖に近づいていった。この時の落ち着き払った三千太郎の涼しげな眼差しが、後で町中の話題になったものである。

いつ賊の銃が火を吹くか、弥次馬たちは息を呑んだ。

引金が早いか。鎖の方が先か。

突然、人質のりうが男の脛をかかどで蹴った。

一瞬、男がよろめいたのと分銅がみぞおちを突いたのは同時であった。

すかさずりうの体を勝壽が抱き留め、その間に正道が猛然と剣をふるって三人の賊を峰打ちにしていた。後の者はちりぢりに逃げ去った。

「こいつら……」刀を収めた正道が地べたに転がった拳銃を拾い上げた。「幕府を批判していたそうじゃないか」

門弟たちが賊徒に縄をかけているのを眺めながら、正道はそれと意識したかどうかかわらないが、江戸城のある北の方へ顔を向けて、

「国の護りは、朝廷から大政を委任されている徳川將軍家のお役目。このような押し借りゆすりの輩が、おこがましいにもほどがあるう」と、吐き捨てるように言った。

悪漢にはがいじめにされ、とっさに勝壽の胸に飛び込んだりうは、恐怖にわななきながらひしとしがみついていたが、ようやく人心地がつき、我に返って顔を上げた。

勝壽と目が合うと、きつく寄せていた眉をひらいて、とたんに頬を紅潮させた。

勝壽も顔が上気して、二人は慌てて身を離れた。

その様子を見た正道がからかうように、

「おまえが助太刀せんから、賊を数人逃してしまったぞ」と苦言を呈した。

南町の強盗騒ぎは、すぐさま大田村にも伝わってきた。地曳新兵衛はこのとき、初めて三千太郎の名を聞いたのだった。総三郎と正道の兄弟、伊藤実心斎などの盛名はこれまで幾度も耳にしてきたが、この一件で新たな剣士の名が一夜にして知れ渡ったのである。もしもこれが江戸表の事件だったら、きっと錦絵の題材にさえなっていたことだろう。

そんな少壮気鋭の大河内三千太郎に、我が愛娘が嫁ぐのだと思えば、これ以上の良縁は考えられず、感極まって涙も出ようというもの。新兵衛は懐紙で水漬をかみつつ、にじんでくる涙をぬぐうのであった。

外が夕闇に包まれて、座敷の雪洞に火が灯された。

媒酌人の友野七左衛門が容儀をただして盃事を執り行う。

三の杯を三千太郎が飲み干すと、

「ご祝着にござる」

なをがを飲み下すと、

「内助の功を立てられよ」

それぞれに声をかけた。

三千太郎がちらとなをの様子をうかがうと、なをはすぐにその視線に気が付いて、眼を細くして微笑み返す。

一目見たときから、なをのことしか考えられなかった。

五月のあの日、木更津湊で初めて出会ったその日から。

三年ぶりにみる島屋は、相変わらず繁盛していた。白壁土蔵造りの店舗は南町で一番大きな建物であり、暖簾の下をひっきりなしに人が出入りしている。木更津で売れたものは江戸でも売れるとうたわれたほど、この町は流行の最先端であり発信地だった。人の動きや風俗に厳格な規制がなく、いわば一種の自由都市であったから、消費者の志向を捉えや

すかったのだろう。江戸から商品を買付けに来る商人や観光客でいつもぎわっている。

三千太郎が店先に現れると、帳場格子の前を行ったり来たりしながら大福帳をくくっていた番頭風の男が「おや」と顔に喜色を走らせた。

「ミチタじゃないかえ」

さっそく駆け寄って行李を降ろしてやり、長期にわたる遊学の労をねぎらいつつ、丁稚に足の洗い桶を用意させた。びんつけ油でまとめた小銀杏の鬚を輝かせ、てきぱきと動くこの若旦那は、島屋の大番頭孫左衛門の長男で茂三郎という。三千太郎より六歳年上で、すでに父を助けて店を切り盛りしている。無駄のない生産性の高い身のこなしは、これも不二心流の稽古の賜物だろうか。熱めのお茶に塩昆布を添えて出すあたり、万事においてぬかりがない。藍染の専門店のことを「紺屋」ともいうから、紺屋の茂三郎をつづめて「コンモ」という愛称で呼ばれている。

「どうしたんだい、なんだかぼんやりしてるじゃあないか、波に揺られて疲れがでたのかい、そんなやわなミチタでねえべか、まあまあ今夜は盛大に祝ってやるから、腹を空かせて楽しみにしていな」と商売人らしい諧調のある声で一息にまくしたてた。

湊から直に仕入れてきた新鮮なカレイと車えびの煮つけ、しゃこの塩ゆでが大皿に盛り、芯にかんぴょうを入れた分厚い太巻きずし、小蟹の味噌汁、あさりのたたき味噌、いだこのうま煮、うごの酢の物、各種野菜の煮しめと、これでもかと並べられたお膳には、松竹梅をかたどった干菓子まで添えられている。

当主の幸左衛門に上座を勧められた三千太郎は、三年ぶりに再会した一族に慰労され、にぎやかな団らんの主役であるにもかかわらず、どこかうわの空で、飲みかけの杯を手にしたまま、なかなか箸も進まない。

そんな三千太郎の不可解な様子を見逃さなかったのは、総三郎の娘、四つ年長の豊である。父親が取り決めた男の元へ一時は嫁いでいたが、早々に離縁して戻って来た。

三千太郎が厠に立つのを見計らって、豊は後についてゆき、縁側で事の次第を問いただした。

三千太郎は慌てて取り繕おうとしたが、いつもは冷静沈着のミチタが、視線を泳がせて口ごもる様を、これはひょっとして恋煩いかもと察したあたり、女の感の鋭さといえようか。

言い当てられた三千太郎は観念したとばかりに、

「豊姉エ、誰にも言わんでくれ。おれはどうやら、すまさんの妹を好いてしまったらしい」

と真っ赤になったのは酒のせいではあるまい。生まれて初めて味わう胸の苦しさに耐えかねて、三千太郎は差し迫った様子で豊にたずねた。

「豊姉エ、おれはこれからどうすればいい」

ふふんと豊は貫禄のある含み笑いをしてみせた。

「結婚するんだよ」

「結婚！ まだ早えべ」

「早いもんか。お互い、ちょうどいい年頃だよ。近ごろあ二十歳を過ぎた女は年増あつかいさ。あたしなんか肩身が狭いよ」などと愚痴をこぼしつつ、

「まずは何か、贈り物をしてみな。うちは染物屋なんだから、上等な藍染をみつくるって、あんたが好いているという気持ちを、その子に伝えなきゃ」

「おれに、そんな器用なまねができるかなあ」

「うじうじしてんじゃないよ。相手の懐に飛び込まないで、どうして勝つことができるんだい」

そう言われれば剣士として返す言葉もなかったし、何かしらきっかけをつくらなければ進展など望めないのは確かだろう。

亥の刻にさしかかるころ、三千太郎は常盤之助と連れ立って島屋の邸宅を辞去した。二人は木更津南郊の母の家で暮らしている。実母のクニは、借家住まいで小料理屋をしていた。

一郎の死後、息子たちと本邸の方へ移って来るよう幸左衛門から再三促されたが、本妻の久や朝三郎の胸中をおもんばかればそのようなことは死んでもできず、なにより店をきりもりして忙しく立ち回っているのが好きな性分でもあったから、かつて一郎が仕立ててくれた藍染の暖簾をたたむつもりはなかった。

今宵まったく箸の進まなかった三千太郎のお膳の余りと、クニへのお土産を豊がお重に詰めてくれたので、三千太郎は重たい風呂敷包みをぶらぶらさせながら下駄を鳴らして歩いた。常盤之助はいける口だから、周りにすすめられるがままに呑んで、したたかに酔っていた。

「ミチタはいいよなあ。やりたいことがはっきり定まってて」襟足のあたりを搔きながら嘆くような声を上げた。

「おまえも剣の腕が立つのだから、江戸に遊学させてもらえばいいじゃないか」

「いやいや俺は」と常盤之助は頭の上で手をゆらゆらさせた。

「剣で身を立てるほどの覚悟を固めてない」

「なら、藍染の道へ進んだらどうだ。器用だしな」

「いやいや」と、手をゆらゆらさせた。

「どちらも覚悟ができてねーのよ。ほんとうにやりたいことが見つかってねえんだ」

「常盤はなんでも人並み以上にできるからな。器用貧乏ってやつだろう。その点おれは、染物のことはまったくわからないし、興味もない。剣が得意というより、それぐらいしかやれることがない」

「謙遜しちゃってよう」常盤之助がからかうように笑い出すと、とたんに足がもつれてふらつき、三千太郎が慌てて体を支えた。

三千太郎にもたれかかり、草履を引きずるようにして家の上がりかまちにたどり着くと、常盤之助は板敷に倒れ伏していびきをかいた。

「母さん、腹減ってないか。豊姉エが余り物を持たせてくれたから、一緒につまむべ」

風呂敷を開くと蒔絵黒塗りの重箱が三つ重ねられていた。

「お酒呑むかい？」

三千太郎は蓋を開けながら首を振った。

クニは土間へ立って、麦湯を入れて戻って来た。

「これはまた美味しそうな落雁だねえ」と梅の花をかたどった桃色の干菓子を手に取る。

「母さんは、結婚して幸せだったか」

「また急にそんなことを」

「所帯を持つのが、大変なことかな」

「好きな娘さんでもできたのかい」

いや……と口ごもりながら、三千太郎はシャコの殻をむいた。

「あたしは困い者だからね。本妻のお気持ちを差し置いて、幸や不幸を言うのははばかられる。でもね、旦那様はほんとうに優しいお人だった。誰かに惚れたり、惚れられたりすると、人ってしぜんと心にハリが出てがんばれるものだね。幸いにも、あんたらみたいな子宝にも恵まれたし」

三千太郎はほのかな笑みを浮かべると、指先を拭い、麦湯を一口飲んだ。

「それにしても母さんは、島屋の母様とは、まったく性格がちがうな。あのひとは陰、母さんは陽」

クニは「あら」という顔をしてみせた。

「お久さんは生真面目なお方だから、立派に商家のおかみさんを務めていたし、あたしは元氣ぐらいしか取り柄がなかったけど、旦那様の気晴らしにはなっていたでしょう」

「仲、良かったよなあ。物心ついた頃は、母さんが本妻だと思ってた」

「あんたたちには肩身の狭い思いをさせてきたね。ほんにすまないと思っているよ」

「何言ってるんだ。肩身なんかちつとも狭くねえさ」

三千太郎は煮しめに箸を伸ばした。

「島屋火事のあと、父さんは万金をいとわず町の復興に努めたって、今でも語り草になっている。おれは、そんな父さんのことを誇りに思うし、木更津の町を、父さんの形見だと思

ってる」

人心地ついて足を投げ出した三千太郎は、思い出したように大きなため息をついた。

「今夜、やっぱり朝三郎兄さんは顔を見せてくれなかったよ」

妾腹の子の故に、正嫡に嫌われるのは致し方ないことかもしれないが、クニが年々気がかりなのは、三千太郎が非の打ちどころのない男児に成長すればするほど、凶らずも久や朝三郎の感情を害することになってしまわないか、ということであった。クニは膝を正して息子を見つめると、

「いついかなるときも、朝三郎さんを心から敬い、長幼の序をわきまえるのですよ」と、つい口やかましく言ってしまふ。

翌日、三千太郎は、邸の西向きにある朝三郎の部屋を訪った。

「兄さん、なかへ入ってもよろしいですか」

しばらく間をおいて、「ああ」とけだるそうな返事が山水柄の襖の向こうから聞こえた。

ゆっくりと敷居の溝を滑らせて襖の一方を開けると、和綴じ本に埋もれて朝三郎が寝転んでいる。

過度の本好きで、経書や思想書の類は一切読まないが、漫画のような趣の黄表紙やら洒落本、人気の読本などは必ず貸本屋から取り寄せて読んでいる。安房を舞台にした『南総里見八犬伝』は版本全巻を揃えており、八犬士や武将の浮世絵を収集するのが趣味だった。

「兄さん、おれは絵のことはよくわからないのですが、なんでもこれは歌川国芳の武者絵だそうです。江戸の土産です」

と差し出して、両の手を畳に付けて平伏した。

「長らく留守をしましたが、おかげさまで他流の極意を学ぶことができませんでした。これからも修業に励みますので、どうぞよろしゅうお願い致します」

「国芳、じゃない、だろ」

「はい？」

「これは、国芳じゃない。国吉って、誰だ、こりゃ」

朝三郎が畳にふわっと投げ出した和紙を拾い上げてみると、なるほど絵師の署名は国吉だった。朝三郎は寝転がったまま、

「浮世絵でも、あてがってりゃあ、おれが、喜ぶとでも、思ったか」

火傷で引きつった頬の皮膚が、片方の目尻と口元をこわばらせているせいか、朝三郎はいつも相手をにらみつけているような顔つきをしている。表情を見ただけでは、その内心を測りかねるものがあった。しかも、片方の口角が動かないため、活舌も悪い。

「これ、けっこう値が張ったものだったのですが……」

「大河内家は、先祖が田舎者ゆえ、格式、というものを、理解しておらぬ。妾腹を江戸へ遊学させ、身の丈を越えた贅沢など、させるから、国吉などという贗物を、つかまされもするのだ。しかも、それを、したり顔でおれのところへ持ってくる、などとは、笑止千萬」

朝三郎の機嫌を損じてしまったことを、三千太郎は再び平伏して詫びた。

三千太郎は、これまで一度も朝三郎と風呂へ入ったことがなかったから、くわしいことは知らないのだが、この邸で育った茂三郎や正道の話によると、朝三郎の火傷の痕は全身におよび、腰から太ももにかけての皮膚の引きつり方が特にひどいため、長時間正座するのはきついらしい。

そんな朝三郎のことを、三千太郎は掛け値なしに尊敬しているのである。かつて全身に火傷を負い、一時は死にかけた少年が、たとえ大きな障害が残ったにせよ無事に生き延びたのである。今でも三千太郎の幼い記憶の中に、全身を晒し木綿でぐるぐる巻きにされた十二歳の朝三郎の姿が焼き付いている。白い木綿が血と膿でべったりと染まり、その中に未だこと切れぬ生命が呼吸をしているという事実には幼いながらも脅威を感じたものだった。あの兄の姿を思い出すたびに、三千太郎は畏怖の念すら覚える。あの生命力こそ、武人

が最も必要とする本質的な強さなのではあるまいか。亡き父には、この強さがなかった。朝三郎のそっけない態度や物言いに腹の立つこともしばしばあるのは事実だったが、剣術の修業を積むにつれ、三千太郎は兄の生命力にあやかりたいとすら願うのである。

島屋の広大な敷地には、染め液を作るための大きな甕が列になって埋められている。甕と甕の間に火壺が設置され、かなな屑を燃やして温度を調節しつつ、藍の発酵を促進させると一週間ほどで染めごろの染料ができるのだった。この一連の作業を「藍建て」といった。

藍を建てるための温度調節が作業の要であり、これが一番繊細な感覚を必要とする作業でもあった。この場所へ来ると、いつも藍甕のそばに腰をかけて、銀のキセルをくゆらせている若者がいる。

「ヌイ、ちとかまわぬか」

三千太郎が声をかけると、若者は我に返った様子で振り返り、煙草盆を引き寄せると、ぽんと雁首をたたいた。

歳は、三千太郎と同じである。

島屋の大番頭孫左衛門の息子であり、コンモこと茂三郎の弟である。正統二代縫殿三郎の一字をもらって縫之進という。月代を剃ってはいるものの、鬚を後ろに垂らしたままだったから、しぜんといま流行りの壮士風の髪形になっている。

物心ついたときから染液を指に付けたり着物に擦り付けたりして遊ぶ子供だっただけに、すでに藍染職人として頭角を現している。店主幸左衛門から「天賦の才」と太鼓判を押されるほどの腕前であった。布に様々な趣向の模様をつける型付職人でもあり、流行の発信地である木更津の、その発信源ともいえる存在になりつつある。

「ヌイよ、伏して頼みたいことがある。年頃の娘が喜びそうな藍染の手拭いを一本、みつくるってくれないか」

三千太郎が照れ臭そうに切り出すと、

「年頃の娘？ ああ、荒武者ミチタも、ついに恋をする年頃になったのかい」などと年上のように苦笑すると、刻み煙草を一つまみ、指で丸めて火皿に詰めた。チツチツと火打石を使いながら、

「恋の色って何色かねえ」と遠い目をしながら細い煙をはいた。

「考えたこともねえな」

「ミチタはいま、どんな気分だ」

「あの娘のことを考えると、胸が苦しいような感じになって、飯も喉を通らなくなる」

「その気持ちを色にしたら、四回ほど染めた藍に刈安を重ねた感じにならねえか」

「さっぱりわからん」

「ミチタの恋は、暗い色味か」

「いや、苦しいけど、暗くはない」

ほう。と縫之進は思案顔をして、渋茶を一口すすった。

「なら、甕覗きがいいかもしれねえな。ちょっと甕をのぞいた程度しか染液に浸けないから、淡い色になる。清潔な色味だから、きつと気に入ってくれるだろうよ」

「頼む。その手拭いを一本、おれに売ってくれないか」

縫之進の染めた手拭いは、今や江戸表でも飛ぶように売れている。値が上がり過ぎて庶民には手が届かなくなっているほどであった。そんな中でも最新作の売り物を、縫之進は店の桐箆笥から取り出した。

広げてみると、灰みの青地に白いたんぼぼの綿毛がいくつも空を漂っているような可愛いらしい図柄で、

「鼓草綿毛之舞と名付けた一品だ。どこの娘にやるのだから知らねえが、きつと気に入ってくれるさ。金はいらん」

キセルをくわえたまま、仕事場へ戻って行った。

「恩に着る」

三千太郎は語気を強めて頭を下げた。

年がら年中鬻場に籠りきりの縫之進であるが、職人仕事に疲れると、ふらりと道場へやって来る。そして、創作のうっぷんを晴らすように竹刀を遮二無二に振り回すのだった。その立ち回りは、一見でたらめな剣舞のようにも見えるのだが、実戦となったら案外、又イが最強かもしれないと三千太郎はつねづね思っている。

八劔八幡神社の道場に祀られているのは八幡大菩薩である。神前に座礼をして、一日の稽古が始まる。

門弟の顔ぶれの中に、ひさしぶりに地曳新一郎が交っていた。「明王丸」が帰港している合間にひと汗かきに来たのだろう。地曳家に婿入りしてからというもの、忙しくて以前のように稽古に顔を出せなくなっていた。

幕府が海外に門戸を開いてからというもの、国内経済は混迷を極めており、貨幣や物産の流出に歯止めがかからなくなっている。しかし、いかに景気が悪いといっても、木更津の五大力船は江戸と房総地域を結ぶ大動脈であったから、休む暇もなく、定期便は運航していた。

面鉄と竹胴を着けた新一郎が、右肩の脇に竹刀を立てて構えたのは、みなぎる闘志のあらわれだろう。他の門弟たちがそれを見て、

「八相の構えか」とざわめく。

一方、三千太郎は、竹刀の剣先を新一郎の左眼に向け、中段の構え。

一足一刀の間合いを破り、新一郎が気合をかけて打ち込んだ瞬間、すかさず籠手を打たれた。あまりの速さに刃筋がまったく見えなかった。

「もう、ミチタとは互角に打ち合えん」

面を外した新一郎は、半ば呆れ顔で笑った。

日が中天にさしかかり、稽古着がじつとりと汗ばんでくる。

新一郎がもろ肌を脱ぐと、背中から腕にかけて描かれた、赤い牡丹の入墨が鮮やかであった。

この彫り物は、お洒落が目的なのではない。船乗りは不慮の死に備えて身元がわかるようにしているである。「板子一枚、下は地獄」ともいわれたように、海の仕事には大きな危険が伴う。江戸湾内を航行する船でさえ、天候が荒れれば沈没することもめずらしくなかった。

それにしても、彫り物といえば龍の図柄が定番であったのに、牡丹とはいかにも女性的な趣向のようにも思われる。あるいは新妻のすまの好みであろうか。船頭の女房となつて以来、航海安全を祈願するすまの信心はけなげなほど一途で、波止場にある直営の船宿に居る間は、日々八剣八幡神社への参拝をかかしたことがない。ときどき料理の練習をかねて、実家にいる妹を誘い出すこともあった。

三千太郎が江戸に出ている間、島屋門の門弟たちは地曳の姉妹とすっかり親しくなっていたらしい。三千太郎は、縫之進に見つくるってもらった手拭いを畳紙で包み、防具入れの底にしのばせて、一日千秋の思いでなをの来訪を待っているのだった。

昼飯時、すまが提重箱を持って道場の板敷へ上がって来た。かまちで履物を脱いでいるのは、なをだろう。

二人とも黒襟の地味な小袖を着ていたが、これが江戸の流行りであることを三千太郎は知っている。着物を腰のところで折り上げて、しごき帯を斜め後ろに垂らす。幕府が庶民の贅沢を厳しく取り締まった結果、地味で家事に適した恰好が洗練されて、今では流行の装いとなっているのである。

なをは道場の敷居をまたぐと、真っ先に三千太郎の姿を探したようであった。そしてちらと目が合うと、すぐに視線をそらして姉の横に座った。

重箱の中身は、山盛りの巻きずしと、紅白なます、たくあん、そして大量のあられであった。

「あられは八つ茶にどうぞ」となをが言った。

門弟たちの手が待ち焦がれていたように伸びてきて、あつという間に巻きずしも漬物もなくなってしまった。皆、「やっぱりなをさんの弁当は美味しいなあ」と唸りながら頬張る

。すまがふてくされたように声を上げた。

「あたしだって手伝ってるんだからね。ふと巻きを切り分けたのはあたしなんだから」
どっと道場が笑いに包まれた。

三千太郎は手を膝にして、なんとか平静を装っているものの、内心では他流試合よりも緊張していた。なをがはす向かいに座っているというだけで心臓が高鳴る。この場に居る誰よりも、なをの手料理を食べたかったのは三千太郎であろうが、わずかに手を伸ばすのが遅れたために、残っているのはあられだけだった。なをが「八つ茶に」と先に言ったおかげで残っている。

何も口にしていない三千太郎に向かって、

「あられ、いかがですか」

緊張した様子でなをがすすめた。

三千太郎は黙って頭を下げ、一粒つまんで口に入れた。

なをの料理上手は木更津一帯では知らぬものないほど有名であるが、なるほどこれは匂いからして香ばしく、醤油と青のりの風味が口の中いっぱい広がる。

思わず「美味しい」と三千太郎が口走ると、なをの頬に赤みがさした。

「うちはお正月に、たくさんもち米を搗くんです。おろした山芋を少しずつ入れながら搗きます。それを小さく切って、乾かして、食べるときほうろくで煎ると、ぷくつとふくらんで、ふわふわのあられになるんです」

早口で説明するなをの横顔をのぞき込んだすまが、

「けっこう手間がかかってるんですよ」と補足してみせた。

今朝、二人で酔めしを交ぜているときから、そわそわした様子のなをを見てそれとなく察していたが、相手は三千太郎さんだったか、と得心する。

五大力船の出航は、潮の具合に問題がなければ未明であるから、新一郎は昼で稽古を切り上げた。

上がりかまちまで見送りに出た三千太郎に向かって、すまが出し抜けに言った。

「三千太郎さん、わたしたちは朝が早いから、なをを川舟の着場まで送ってあげてください」

それを聞いて驚いたのはなをであったが、新一郎も空気を察し、意味ありげに含み笑いを浮かべて三千太郎の肩を叩いた。

舟着場まで、道場から歩いてすぐである。地曳夫婦のせつかくの気づかいにもかかわらず、三千太郎となをは、お互いかしこまったまま何も話さなかった。

矢那川の流れはおだやかで、喫水の浅いべか舟は、棹をさして上流まで遡航することができる。なをは船頭に船賃を渡すと、何か言いたげな表情をして振り返った。しかし、舟はゆっくりと川岸を離れた。

何とも言えない物哀しさが、三千太郎の胸を締めつけた。なすすべもなく立ち尽くしていたが、突如「あっ」と思い出したように道場へ駆け戻る。

板敷をけたたましく踏み鳴らし、防具入れに手を突っ込んで白い包みを取り出すと、すぐ道を取って返した。

なをを乗せてゆっくりと遡上するべか舟に追いつくと、全力で走って気持ちに勢いがついたものか、三千太郎は船頭に向かって「頼む、乗せてくれ」と声をかけた。

川岸に寄せた舟に乗り込むなり、三千太郎は息を弾ませて言った。

「なをさん、これ、あられのお礼です」

突然のことに、なをはことばも出ない様子であったが、三千太郎にすすめられるがまま畳紙を開くと、「まあ」とかん高い声を上げた。

「すごくきれい」

その手拭いは、と言いかけて、三千太郎はことばをつまらせた。鼓草……、なんだっけ。

「いただいてもよろしいのですか。お高い品ではございませんか」

「うちは紺屋ですから、そういったものは、いくらでもあるんです」

「ありがとうございます。大切にに使わせていただきます」

なをはひしと手拭いを胸に抱きしめた。

三千太郎はべか舟に乗るのが初めてで、その船足のあまりの遅さがかえって新鮮に感じられる。

「なをさんは、いつもこれに乗ってくるのですか」

との問いに、歩いた方が早くないですか、という含みもあると察したなをは、袖を口元にあててくすくす笑った。

「わたし、怖くてあすこを通れないんです」

と、川の左方向を指差した。そこには、うっそうと茂る竹やぶがある。

「ああ、西光寺の処刑場。確かに、あすこは昼でも薄気味悪いな。おれも稽古で請西藩に行くとき必ずあの脇を通るから、その気持ち、わかります」

「三千太郎さん、請西に出向くことがあるんですか」

「出稽古の手伝いで。子供の頃は足しげく通いました」

請西藩地は、遡上する舟からみて右側に見える台地である。

「あすこはうちの近所だし、わたしの従兄は請西藩士なんですよ」なをは誇らしげに言った。

請西藩一万石は、三河以来の譜代、林家が治めている。

林氏は、徳川がまだ「松平」姓だった頃、家康から遡ること八代の祖、松平親氏の世話をした林光政の子孫であった。貧しい光政が、正月に親氏をもてなすための料理を用意することができず、みずから山野をめぐって得た一羽の兔を吸い物にした逸話は、徳川家草創期の美談となって語り継がれている。この故事をもとに、林家は代々正月に兔を献上し、家臣で最初に杯を賜る栄誉を授けられていた。旗本として領地を加増され、文政八年、一万石の大名に取り立てられたのである。

領内に城はなく、台地上に建てられた真武根陣屋が政庁であった。

矢那川を挟んでその真向かいに位置する小高い丘が、なをの実家の裏山にあたる太田山である。

田植えを終えたばかりの水田が、空を映して広がっていた。

「三千太郎さんは、お百姓さんが田の畔を作るのを見たことありますか」

「じっくりと見たことはないかなあ」

「鍬で泥を掻き上げて、上を平らにならして、びっくりするぐらい手早く上手に作るんですよ。農繁期は、村の奥さんたちがねんねこ(赤ん坊)をえじこに入れてそこら中に置いているから、わたし、お守りをさせてもらうんです。ねんねこって、いい匂いがして、やわらかくて、すごく可愛いですよね」

三千太郎はふと、これまで生きてきて、こういった話題に触れるのは初めてのことでないかと思った。ひたすら剣の修業に打ち込んできただけの自分が、なをが語る赤ん坊の話に耳を傾けて、それを楽しんでいるという事実になんか驚きを覚えた。

太田山を真横に見るあたりにさしかかると、舟が舳先を少し傾ける。川岸の小さな栈橋に寄せると、そこでなをは舟を降りた。三千太郎はこの先どうしたらいいのか測りかねていたが、なをの方から、

「三千太郎さん、お茶でも飲んでいかれませんか」と声をかけてくれた。

ここがなをの生まれ育った村だと思うと、一木一草に至るまで尊く思えてくる。三千太郎は、汗臭い稽古着のままここまで来てしまったことに今さら気がついて、襟元や袴を直すのだった。

道の傍らに、いんげんや水ぶきが生えている。あらゆるところに食用の植物が植えられており、町の往来とはちがった匂いがする。シラサギが長い脚を一步一步踏みしめるように水田の中を歩いていた。

太田山を間近に仰ぎ見ると、樹木の緑が色濃く盛り上がり、どこか神域を思わせるような壮言さを感じる。

「この山……」

なをは三千太郎にささやきかけるように言った。

「恋の森、っていうんです」

貴族の和歌にでも出てきそうな響きだと思ったが、不思議と三千太郎は違和感を覚えなかった。

「どんな由来があるんですか」とたずねると、なをはそれが質問の答えでもあるかのような調子で、

「この山のとっぺんに立つと、木更津の町が一望できるんですよ」と言った。

太田山といっても、規模からいえば小高い丘と呼ぶ方がふさわしいかもしれない。しかし山頂へ続く道の勾配は思っていたよりも急だった。

坂道を少し上ると、なをの実家を見下ろすことができた。間口十五間以上はあろうかと思われる茅葺きの主屋、大きな長屋門、馬小屋、納屋、木小屋、どの建物も手入れが行き届いており、三棟並ぶ土蔵の漆喰は塗りたてのように白かった。

見た目から想像するよりもずっとたくましい足取りで、なをは三千太郎の先を歩いた。

「三千太郎さんは、木更津という地名の由来をご存じですか」

少し息を切らせながら振り返る。

「なにぶん、おれは学問がなくて、恥ずかしながらそういった知識が微塵もない」

照れ臭そうに苦笑する三千太郎を見つめて、なをが目を細めた。

坂を上るにつれて、二人の額のあたりにうっすらと汗がにじんでくる。

「上古の時代の話なんです」

と、なをが前を向いたまま語り出した。

かつて、景行天皇に命じられて東国遠征に向かったヤマトタケルノミコトは、三浦半島から船で房総半島へ渡り、上総を経て東北地方へ遠征しようとしていた。

妃を連れて相模の海岸から船団を繰り出そうとした矢先、それまで快晴だった空模様が

一変して怪しくなった。暗雲に稲妻が走り、地響きのような雷鳴がとどろく。激しい風雨が海を荒らし、タケルの軍勢は足止めを余儀なくされた。このとき、タケルが荒れ狂う海を見て「水走る」と叫んだことから、かの地を「走水(神奈川県横須賀市)」と呼ぶようになったと伝わる。天候の回復を頼み、出航を待つこと数日、野獣が猛り狂うような嵐は一向に収まる気配をみせない。すぐ目の前に房総半島が見えているのに、無為の時間だけが過ぎてゆく。血気盛んな兵士たちは鬱屈して苛立ち、タケルに渡海すべしと迫った。これ以上とどまれば士気が低下すると判断したタケルは、悪天について一斉に船を出したのである。

「このような小さな海、飛び上っても渡ることができよう」

出帆に先立ち、タケルの放ったこの一言が、海神の怒りに触れたのかもしれない。船団は暴風雨に翻弄され、帆柱をへし折られ、進むことも退くこともできなくなり、大波にいたぶられる木葉のごとく、各船続々と逆巻く怒濤に飲み込まれていった。さすがのタケルも万事休すとあきらめかけたその時、妃のオトタチバナ姫が申し出る。

「わたくしが海に入り、神の怒りを鎮めましょう。どうか皇子はつつがなく、務めを果たしてください」

そう言い残して荒波に身を投じてしまった。

すると、嵐がおさまり、海上は嘘のように穏やかになった。

なをはここまで話すと、歩みを止めて、記憶をたどるような上目遣いになった。

「あれ、みこにかわりて、海のなかに入らむ。みこは、つかわさえしまつりごとを遂げ、かえりもうすべし」

と、古事記の原文を暗唱してみせた。

「このとき、ミコが海を渡ってたどり着いた場所が、今の八劔八幡神社のところなんですよ」

三千太郎は、自分が生まれ育った場所にそんな言い伝えがあったことを知って率直に驚

き、深く感心した。そんな三千太郎の表情を見て、なをはさらに情感を込めて続きを語る。

「ミコは、オトタチバナ姫を失った悲しみにくれて、独り海岸を歩いていました。すると、姫が身にまもっていた衣の袖が、波打ち際に流れ着いたの。その場所が、袖ヶ浦です」

このときタケルが詠じたと伝わる和歌を、なをはこれもまた諳んじてみせた。

君去らず袖しが浦に立つ波の

その面影を見るぞ悲しき

（あなたがわたしの心から消え去ることはありません。）

あなたの袖が流れ着いた海の波間に

あなたの面影が見えて悲しいけれど）

「この歌の、〈君去らず〉の部分、きさらづの語源になったんです」

なをの歩みが小走りになった。急な坂道と斜面の樹木が唐突に尽きて、広々とした見晴らしのいい太田山の頂に出たのである。

「三千太郎さん、ほら」

なをの手が向けられた先は、木更津の街並みと江戸湾を一望する広大な見晴らしであった。

思わず三千太郎は「ああ」とため息をついた。丘のように小さな山から見晴るかす景色が、これほど圧巻だとは思わなかったからである。

夕陽を照り返す沖のさざ波が、錦鯉の鱗のように細かくきらめき、白い航跡を長く引きながら、五大力船や押送船が南北に行き交っている。

木更津の周りには高い山がないため、四辺の見通しが良く、海に突き出た富津岬の海岸線と、三浦半島の山影にかかる富士の山容が、一幅の絵のように映えている。内湾特有の蒸し暑さを感じさせない爽やかな風も欠けてはいない。

「ミコは、ここに立って海を眺めながら、吾妻はや、ってささやいたそうです。わが妻よ、ああ……。って」

なをの口ぶりに豊かな感情がこもっているせいか、「わが妻よ」という響きに三千太郎はこみ上げてくるものを感じた。

「タチバナ姫を失ったミコは、もう戦いのことなんて忘れて、ずっとここにとどまっていたんですって。それでここは君不去(きみさらず)の地と呼ばれるようになって、やがてきさらづになったという言い伝えもあるんですよ」

古事記を読んだことがなくても、日本人なら誰もがヤマトタケルを知っている。武人の鏡であり、国を興した英雄の一人である。なをの昔語りを聞いて、三千太郎はこの英雄の存在をとて身近なものに感じた。

「木更津」という地名の由来は、他にも諸説ある。三千太郎は子供の頃、コンモからこんなふうにならった。木更津ではやどかりのことを「きさご」と呼ぶが、このきさごがたくさんいる津(海岸)だから「きさごつ」。これがいつしかきさらづになったという。やどかりとヤマトタケルじゃえらい違いだと三千太郎は思った。

頂の樹々の中に、小堂ほどの神社が建っている。鳥居もあり、檜皮をふいた切妻屋根の、美しい流造の社殿であった。額束に「橘神社」と書かれている。君去らずの故事が由緒であろう。

「ヤマトタケルノミコトって、とても強いお方でしょう。そんなお方が、妻を失った悲しみでここを立ち去れなかったなんて、なんだかとっても人間らしくて、素敵だなあって思えるんです。二人の強い絆を偲んで、昔から太田村の人たちは、この山のことを「恋の森」って呼んでいます」

気性が荒い湊町の伝説にしては、女性の仮名文字で書かれたように美しい物語であった。三千太郎は後で思い返せば不思議なほど、ヤマトタケルの悲しみに深く共感したのだ。つた。

「橘神社は、縁結びの神様なんですよ」とささやいて、なをが掌を合わせた。夕焼けに照

らされた彼女の横顔が、とても大人びて見えた。

その姿に誘われるように、三千太郎も合掌し、深く目を閉じた。

「三千太郎さんも、大切な人を失ったら、ここを立ち去れなくなってしまいましたか」
手を合わせたまま、なをは三千太郎の横顔を覗き込み、冗談っぽく聞いた。

三千太郎は熱いかたまりのようなものが胸の奥からこみ上げてくるのを感じた。

しばらく肩で息をしていた。気の利いた言葉など思い浮かばず、ただ真っ直ぐな感情がほとばしり出てくるのを抑えることができなかった。

「なをさん、おれと結婚してくれないか」

なをは目を丸くした。簪についた房飾りがゆらゆら揺れ、しばらく時間が止まったようだった。

やがて大きな二つ瞳に涙が盛り上がり、なをは三千太郎の目をしっかりと見つめ返しな
がら、

「はい」と答えた。

二人はこの後、揃ってなをの実家へ行き、父から結婚の承諾を得た。

地曳家が用意した持参金の額と嫁入り道具の数は膨大である。この時代、商家の娘が嫁入りするにあたって、多額の持参金と衣類調度品を付けるのが常識となっており、これらは離縁しないかぎり婚家のものになる。そのため持参金目当ての結婚も少なからずあり、これをめぐって殺人事件に至ることさえあったという。

三千太郎となをのように相惹かれ合った仲でも、持参金云々のやり取りはあった。妻名義の敷金や調度品を記した覚書の作成、受け渡し、新居の普請など、両家共に隆盛を誇る富家であるだけに、支度に並々ならぬ手間がかかっている。まずは諸事万端滞りなく迎えた今宵の労をねぎらい、そこから新郎新婦の前途を祝して乾杯したいところであった。

幸左衛門は、前夜に孫の朝三郎を呼び出し、婚礼に際して、島屋を代表して地曳家に御礼申し上げるようお願い含めていたのだが、先ほどからちらちら視線を送って促しているも

の、あくびをかみ殺しているばかりでなにも言い出さない。そのうち唐突に立ち上がる
と、三千太郎を見下ろすように一瞥して、

「足が、疲れたから、ここまでにする」

と言いついて、足を引きずりつつ座を退いてしまった。長時間端座しているのがきつかつたのは事実であろう。

母の久も、この場を取り繕おうともせず、

「あたくしもまだ本調子ではございませんので」と続けざまに立ち上がり、打掛の裾をさばいて出て行ってしまった。

こうなることは両家共に、心の底ではある程度予測していたことだった。むしろ地曳新兵衛などは、不遜な態度を取り続けている朝三郎が視界から去ってくれて喜ばしいぐらいであった。

不測の事態ともいえないこの展開を受けて、幸左衛門は居住まいを正し、生え際の白くなった鬢を軽く撫でつけながら場を取りつくろった。

「両家を代表致しまして、一言御礼の御挨拶を申し上げます。ここに愚息のいないことが誠に残念です。三千太郎は容姿も資質も父の一郎とよく似ている」と率直に言えたのは、朝三郎と久がこの場を退いてくれたからだったといえなくもない。

「三千太郎はすでに不二心流上段目録を授与されており、江戸で錬武館仕込みの剣技を学んできたばかり、おかげさまで前途有望な武芸者に育ちつつあります。しかし、一人の男としてはまだまだ未熟者。ですから、こうしてなをさんという才色兼備の娘さんとめぐり合うことができたのは誠に幸い、これも一重に八剣八幡神社のお導きかと思われるのでございます」

幸左衛門の謝辞に耳を傾けながら、伊藤実心斎が小声で話しかけた相手は総三郎であった。

「オヤジ」と実心斎は呼んだ。これは総三郎の愛称であるが、実心斎がこう呼ぶとき、そこに親しみらしい感情はこもっていない。

「今からくぎを刺しておく。三千太郎をそそのかして修業の妨げになるようなことはするな。我々は武士ではないのだ。ただ剣術の奥義を極めようと日夜研鑽しておるに過ぎぬ。あんたのように世直しに精を出しても、剣の上達にはこれっぽっちも役立たぬ」

総三郎は苦笑して、

「今夜は、その話はやめておこう」とつぶやいた。

「はぐらかすな。三千太郎は筋がいい。あの力量は、正道をも越えているかもしれぬ。まだまだ伸ばしてやりたいのだ」

「まあ、そう興奮するな、あかじゅう」

「まだあかじゅうと呼ぶか。しつこいぞ、オヤジ」

「子供の頃、頬が赤くて実に可愛かったのだ」と、総三郎はからかっている様子もなく言った。

祝辞を締めくくった幸左衛門が立ち上がり、威勢よくぼんぼんと手を叩いた。

「さあ、今宵は存分に祝いましょう。ささ、無礼講」

女中が下手の襖を開放すると、次の間に控えていた親類縁者がわっと歓声を上げた。あれよという間に整った婚儀であったから、廻国修行に出ている正道の帰省はかなわなかったけれども、両家の身内と友人はほぼ顔をそろえていた。

待ちわびたとばかりに乾杯の音頭をとった茂三郎の鬚は、相変わらずこってりと鬢付け油でまとめられている。縫之進は愛用の銀のキセルをくゆらせており、豊はすでに飲み始めていたものか、赤ら顔を左右に振り向けて大笑いしている。盃をさし合っているのは常盤之助と新一郎、仲睦まじく膳を並べているのは八劔勝壽と金物屋のりう。まずはご祝着と互いに祝いの言葉を交わしつつ、あらためて新郎新婦のすがすがしいたたずまいを眺めるのだった。

「クニさん、こちらへいらっしやい」と本家の家長である縫殿三郎が手招きした。

座敷に招き入れられたクニは、ツツと摺り足で進み出て、うやうやしく手をついた。

「クニさん、今宵めでたく婚儀を挙げる事ができたのは、三千太郎を立派に育ててくれたあなたのおかげです。家も栄えましょう」

縫殿三郎が謝意を述べると、何の異論もないと言いたげな様子で孫左衛門も深く首肯し、

「率直に申して、世間のクニさんに対する風当たりは決してやさしいものではなかった。にもかかわらず、一郎の存命中は内助の功を成し遂げ、畜生腹などと陰口を叩かれながらも立派に子供たちを育て上げたのだ。三千太郎も常盤之助も、クニさんに似て明朗闊達、わたしは何よりそのことを嬉しく持っていますよ」と顔をほころばせた。

孫左衛門は一族中最も大柄で、嘘か誠か若い頃は五拾七貫目(約214kg)の力石を持ち上げたとも云われ、今弁慶と称されている。毎朝寅の刻に起きて木剣を振ること二千回、ざぶざぶと井戸水を浴びてから帳場に出るのだが、誰よりも客商売に熟達しており、島屋といえばまずはこの孫左衛門の温顔を思い浮かべる常連も多かったにちがいない。

クニは感慨無量と言いたげな面持ちで顔を上げると、目尻に微笑を刻んでなをの方を見つめた。

「なをさん、今夜はわたしも、このようにめでたい祝宴の末席に侍らせていただけで、心から嬉しく思っています。三千太郎はほんに果報者です。あなたのように見目麗しく、気立ての良い娘さんと出会えたのも。どうかこれからも、三千太郎のことを、よろしく願いますね」

そう声をかけられると、なをは嗚咽をこらえ切れなかった。

クニは慌ててなをのそばににじり寄り、

「あらまあ、せっかくのお化粧がくずれてしまう」懐紙を揉みほぐしてなをの目元に当ただが、自分も涙がとまらなかった。

あの日、なをと二人で太田山の頂から見た夕焼けの、なんと美しかったことだろう。涙と笑いに包まれた座敷を見回しながら、三千太郎はふと思い出すのだった。

遠浅の江戸湾は、沖の十萬石とうたわれ、海藻や魚貝類の宝庫である。その恩恵に与れば飢えることなく生きてゆけた。そうやって人々は神代の昔から生きてきたのだ。その豊かな自然が、血を通わせて息づく姿が、木更津の夕焼けなのだろう。

今を去ること十二年前、この海に米国使節ペリー提督の率いる軍艦四隻が来航した。江戸幕府は、脅迫じみた砲艦外交に屈し、鎖国を取りやめ海外に門戸を開いた。併せて不平等条約を結び、経済の大混乱をまねき、物情騒然たる時代に突入したのだった。もはや幕府に現状を打開する力などないとみた西国雄藩は天皇を推し立て、徐々に舵を倒幕へ切りつつある。湾内を航行する諸外国の蒸気船は千石船の二十倍を超える排水量であり、航跡波は干潟を越えて湊の石垣にまで届く。その波濤を眺めるだけでも、桁違いの脅威が日本に押し寄せているのがわかるのである。

しかし、あの日の夕暮れ、なをの横顔を染めていた夕日のまぶしさだけが三千太郎の心に残っている。

世界はただ、二人を包む光でしかなかった。